（六）犬の散歩

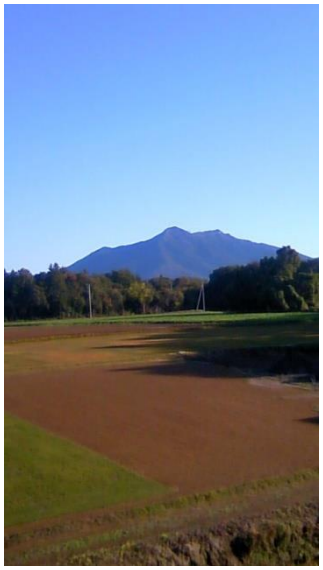
キョキョ、キョキョキョキョと鮮やかに鳴く声に夫婦が顔をあげると、不如帰（ほととぎす）が一直線に空を渡っていく。この鳥が地面や木の枝にいるのを見たことはない。だから、メロディの美しい、「卯（う）の花の匂う垣根に　ほととぎす早も来鳴きて　忍び音もらす　夏は来ぬ」という歌の歌詞は、美しい情景のためのフィクションではないか、と女房は考える。

犬は空高い鳥には興味を示さない。

が、吉は散歩で鎖を放されると、芝生の上の鶺鴒（せきれい）を追いかける。膨らんだ白い袖のシャツに黒のベストとズボンをはいたようで、ヒラリ、ヒラリ、と波打つように飛ぶ優雅な鳥である。犬に鳥が捕まるわけはないと女房は笑うが、芝畑に羽が散らかっていることがたまにあるのは、鷲（わし）にやられたか、野犬にやられたか。

このあたりは自然が豊かで何種類もの鳥が見られる。犬の散歩の際の楽しみである。

広い芝生の上で空の階段を上がるように、羽ばたきさえずり続けながら少しずつ高度を上げていくのはおなじみの雲雀（ひばり）。林の傍でドラミングが聞こえたら、赤啄木鳥（あかげら）が頭と下腹を鮮やかな朱に染めて木の幹にしがみついている。ジージーと鳴くのは横縞の小雀（こがら）、ツツピーとつつましく鳴くのは女房がお気に入りの四十雀（しじゅうから）。



林の下草の中で犬が通り過ぎるのをじっと待っているのは、のんきでとろい小綬鶏（こじゅけい）。100 年前に中国から食用に連れて来られたというこの鳥は、サッと飛びあがるなどという器用な芸当はせず、灰青と錆朱の地味派手な体で、もっぱらヨタヨタと歩く。大きいのは雉（きじ）に山鳥、ただしめったには見られない。

亭主と女房が家を建てた土地は、新興住宅街の端っこにあって、裏には 1 軒の家も見えない。一つひとつがサ

ッカーコートほどもある芝畑がいくつも広がり、その向こうには杉林と雑木林、さらにその上には悠然と筑波山が見える。

この空の広い、開けた景色が気にいって土地を買ったのである。わりに安くもあった。

20 年近く前に家族が遠く広島から引っ越して来た時には、「芝畑」が何であるかわからなかった。一面の丈（たけ）の短い草原で、公園にしては遊具がない。牧場にしては牛がいない。今まで見たことのない風景だったのである。

不動産屋さんに尋ねると、不動産屋さんは女房の質問の意味が理解できなかった。芝畑を見て「芝畑」とわからない人間が世の中にいるとは知らなかったのである。

イヤ、日本は広いね。

どうも芝は、筑波山周辺の農業の特産物らしい。慣れてみると、川沿いの低地は水田だが、少し高台の水の便の悪い土地には白菜畑やキャベツ畑もあるとはいえ、芝畑が圧倒的に多い。列島改造論が叫ばれ、ゴルフ場があっちにもこっちにもできたころから広がったのか。

10 月に夫婦が犬を飼い始めたころは、露のおりた収穫前の芝生に朝日がキラキラときらめき、まるで緑色の宝石の中を歩いているようだった。都会暮らしから考えたら、とんでもない贅沢（ぜいたく）である。

11 月に入ると芝が紅葉する。芝の紅葉なんて亭主も女房も茨城に来て初めて見たが、全部の芝畑というわけでもない。そして霜がおり霧が出るころ、芝畑のあちこちに水たまりのように銀色に光るところが点々と見える。不思議に思って近づくと、直径 5 センチから 10 センチほどの小さな蜘蛛（くも）の巣である。地面に水平に巣を張る蜘蛛がいるのだ。巣についた霜や霧の水気が朝日に輝く。これも珍しい光景だった。

それが 12 月になると、草は枯れ木枯らしは吹きすさび、家から出るのがイヤになる。それでも可哀そうだから、昼近くなっても午前は女房、夕方は下の息子が 2 匹の犬の散歩に出る。

ふと気がつくと、ジョンのウンチが小屋の脇の傾斜地に点々とある。

ありゃ、しまった。

このころ散歩が朝一番でなくなったからかねえ。

犬は自分の小屋の傍でウンチをしたがらず、散歩して離れたところでしたがるけれど、一度、我慢できず小屋の傍でやり始めると絶対なおらないよ、と何人かが女房に言う。

女房はゲンナリした。

ウンチは臭い。

毎度埋めてやるのも手間だ。

よし、しつけてやろう。

散歩の前にジョンを呼び、鎖をひきつけてウンチのところへ顔を持っていくと、犬は抵抗して首を振り、女房の手を咬もうとする。「あんた、何よ」と女房が怒ると、「なんでこんなことで怒んだよ。いいじゃねぇか？　うざい！」という顔をする。ハテ、この表情はどこかで見たような、と思ったら、上の息子が反抗期まっさかりのころ、説教をくらうと、顎をあげ、下目使いに女房を憎々しげに睨（にら）んでいた時の顔と同じである。

犬と息子が同じ表情か、と思い当たった瞬間、女房は吹き出しかけたが、ここで笑ってはしめしがつかない。

グッとこらえ、「あんたね、これはあんたが思っているよりずっと悪いことなんだよ、え？」と声を荒げて鎖をグイと引っ張ると、女房の形相が変わったのに気づいた犬は、「え、そうだったんですか。悪いことだったんですか。知りませんでした」ととたんに耳を伏せ、神妙な顔に変わる。それを見てまた女房は笑いそうになったが、臍下丹田（せいかたんでん）に力を入れ、「そうなのよ、悪いのよ」ともう一度睨（にら）みをきかせて言い聞かせる。

犬を飼い始める前、犬は笑う、というのを聞いて、女房は首をかしげていた。「可愛いと思えばそう見えるのかねぇ、親バカという言葉があるが犬バカもいるんだか」と信じなかったのである。が、犬に慣れてみると、ポーカーフェースの吉はともかく、ジョンの表情は豊かでわかりやすい。

いつかはずみで鎖が離れ、とことことジョンが歩いて居間のガラスの前まで来て、女房と亭主を見つけたとたん、パッと顔が明るくなった。あれは「笑ったんだ」と女房は今では確信している。女房も立派な犬バカになったらしい。犬の知能は人間の3歳程度などというが、女房の子どもが小さかったころ、トコトコと歩いてふり返り、母親の顔を見てニコッと笑ったものである。うん、同じだ。

毎朝散歩の前に女房は根気よくウンチを点検し、犬を呼び、スコップでウンチをすくってはジョンの鼻先に突きつけ、この馬鹿、ここでウンチするんじゃないよ、と睨み、それだけでは効きそうにないので、一番敏感な、という鼻先を叩いて叱る。ジョンは憮然として、後でフガフガと鼻を鳴らす。

散歩でウンチしたらちゃんと褒める。

ひと月たった。

なんの変わりもなく、ジョンは小屋の周りにウンチをし続ける。「おまえはお利口な犬じゃないのかい」と鼻先を叩くと、ジョンは「はぁ、スィマセン。叱られるのはわかるんですが、お尻がいうことをきかないんです。ウンチは出てしまうんです」と情けない顔をする。

確かに人間だと、便意を感じたらトイレに行って用を足すもので、1日2回の決まった時間にだけ用を足すなどという芸当はできそうにない。が、「しつけのできた」犬はそれをする。まさか出そうになったものを尻の穴を閉めて出さずにおいておく、などという器用なことができるハズもないから、「散歩＝ウンチ」という条件反射であろうか。

「餌でしつけたら」と子どものころ犬を飼っていた亭主が提案する。「カリカリのドライフードを持ち歩いて、散歩の時ウンチしたら一口やるんだよ。芸を仕込む時はみんな餌をご褒美（ほうび）にしてしつけるんだから」。

ナルホド。

散歩に出る前に女房はポケットにカリカリを忍ばせ、ウンチをすると呼んで与える。すると2、3回で食べなくなった。安いカリカリはマズイのである。

ダメだこりゃ。

今度は撫（な）で撫で作戦だ。

散歩でジョンがウンチをした後、女房は「お利口！」と叫んで呼んで、背中を撫で撫でしてやる。ささやきながら。

「おまえはお利口だねぇ、いつもこうやって外でウンチするんだよ、そしたら怒られないからね。ナデナデしてもらうのは気持ちいいでしょ」

「お利口！ おいで」と呼ぶとジョンは来る。女房の足に自分の横腹をピタッとつけるのは甘えているのだ。

しかし自分は芝生の彼方を眺めながら、飼い主に尻の穴を見せて撫でてもらう、っていうのは何か違うんでないかい？

尻にお利口しろってかい？ わたしゃお犬様の召使じゃないんだけどね、と女房は首をかしげる。春が来て抜け毛の季節、ま、ついでに無駄毛を取ってあげるけど。それにあんた、ウンチのことを「お利口」っていう名前だと思ってない？

こうして根気強くしつけを始めて半年、ジョンと吉は小屋の周りにウンチをしなくなった。

やったね。

暑いあつい夏がきた。

日が昇ると同時にカンカン照り、9時には散歩に出る気も失せるので、女房は手早く娘の弁当をつくって7時過ぎに散歩へ出ても汗みどろ、それから娘を学校へ送っていくと、車を運転しながら女房の息は乱れ、目は霞み、意識は半ばもうろうとしている。

危ない。

ほとんど熱中症である。

一計を案じ、女房は5時半にとび起きて散歩に出ることにした。30分歩いても1滴の汗も出ない。蝉もまだ鳴き始めず静かで、爽快である。

あきれたのが亭主だった。

ふだん亭主の朝飯をつくるのに6時に目覚ましをしかけても、女房が起き上がる

のはそれより20分後、亭主より遅い。女房の寝起きの悪さは並大抵ではないのだ。それがどうして犬のためなら目覚ましが鳴る前にカパッと起きられる？

寛容なのが一番の取り柄の亭主殿は何も言いはしないが、その穏やかでまっすぐな眼差しは、「今まで俺は女房に大切にされていると思っていたが、それは大きなおおきなマチガイで、実は犬以下だったのか？」という疑惑を如実に告げている。

女房はあわてた。

単細胞で、いかに熱中症にならないか、しか考えていなかったのだが、亭主の誤解は哀れである。犬の散歩に行かない日もハリキッて亭主と同時に起きることにした。

今までより手のこんだ朝飯が食えて、亭主殿はご満足である。

犬好きの亭主はフリスビーを買ってきた。が、慣れていないと、犬が遠くからくる大きな物体をジャンプキャッチするのはなかなか難しい。それではと亭主がドライフードを放ると、とびこんだジョンは、思い切り伸ばした前足をしゃがんでいた亭主の顔に叩きこみ、亭主は後ろにひっくり返った。

懲（こ）りて低く投げると、今度はジョンは飼い主の股間にパンチをくらわせ、亭主は前に悶絶した。

犬はよく遊んでくれる。

もの好きだが気性の優しい亭主は、いつも鎖につながれている犬を哀れみ、散歩で裏の広大な芝畑に出ると犬の鎖を放してしばらく自由に走らせた後で、呼んでまたつなぐ。が、ヤンチャ坊主のジョンは帰ってこない。遊びたくて、存分に走りたくてしかたがないのだ。

従順な吉はすぐに戻る。呼ばずとも飼い主からつかず離れずで、まことに手がかからない。

ある秋の日、林の中で鳥が一声鳴いた。吉はすっ飛んで行き、しばらくすると両掌に乗るほどの鳥を口にくわえて戻ってきた。狩ったのである。

へえ。

お見事。

意外な才能。

やきもち焼きのジョンがすぐとりあげ、なぜか土に、埋めた。吉はまた掘り出してくわえて帰ろうとしたが、あきれた亭主が放り出した。家まで帰ってその話をすると、もの好きな女房は目を輝かせ、「ゼヒとも見たい、拾っておいでよ、ねえ、あんた」と亭主をせっつくので、人のいい亭主殿はヘコヘコと取りに戻った。

「いったいどうするんだよ？」

「食べよう」

「は？」

「これ絶対食べれるやつだよ。まちがいないよ、この錆（さび）朱と灰青は小綬鶏（こじゅけい）だよ、字からしてにわとりの仲間だよ」

「いったい誰がさばくんだよ!?」

「わたしがやるよ」当然とばかり女房は答える。

「やりかた知ってるのか？」

「魚と一緒でしょ。鱗（うろこ）の代わりに毛をむしって、はらわたを出して、鰭（ひれ）や尻尾の代わりに足の先切って」

女房に釣りを教えたのは亭主だが、魚と鳥を一緒にするとは恐れいった。そこへ声を聞きつけ、80になるじい様がノソノソと出てきた。「昔は空気銃で小鳥を撃っちゃ食いよったもんだよ、儂（わし）が子どものころじゃがの」と変わらぬ山口弁で言う。

「うん、これは食べれる。よし、儂がさばいてやろう」

亭主は盛大にのけぞった。

この義父は何十年来の熱心な野鳥の会の会員ではなかったか？ 一時は県の支部長まで務めたのではなかったか？

「そりゃ生きちょる鳥なら介抱してやるがの、死んだものはしかたがない。食うてやるほうが供養じゃ」

昔とった杵柄（きねづか）、じい様がなんの苦もなくさばいた鳥は、にわとりの若鶏ほどの大きさで、野鳥らしく肉はエラク硬かったが、骨と一緒に煮た出汁（だ

し）はエラク旨かった。眉（まゆ）をひそめ、うどんから肉を全部つつきだした高校生の上の娘も、汁はおいしい、とうなずいたのである。そして学校で話し、えらく変人扱いされた。